

## 学生のボランティア活動による地域貢献

大西 史晃<sup>1)</sup> 松田 保<sup>1)</sup> 金森 雅夫<sup>2)</sup> 的地 修<sup>1)</sup> 豊田 則成<sup>1)</sup> 廣木 武士<sup>3)</sup>

### Contribution to the Community by Student Volunteer Activities

Fumiaki ONISHI Tamotsu MATSUDA Masao KANAMORI

Osamu MATOJI Norishige TOYODA Takeshi HIROKI

#### Abstract

Introduction: “Kids Project” is a project which started from 2003 by the Japan Football Association (JFA) and its purpose is to support kids to like sports and also to learn social skills through playing sports. Biwako Seikei Sports College (BSSC) started this project at the same time that JFA did. Student coaches who are certified as JFA Kids’ Leaders visit kindergartens in Otsu city, and instruct kids to do physical activities such as soccer, tag, and so on. Kids learn social skills such as rules, responsibility, team work, and fair play. Since BSSC started this project, it has become increasingly popular in the community year by year. From the year of 2005, evaluation of the project has been carried out at the end of every year. This study was to investigate the result of “Kids’ Project” by analyzing the end term evaluation from 2005 to 2007 and to clarify problems that need to be resolved to provide a better program in the future. Design: The number of kindergartens that participated into doing the end term evaluation was 18 in 2005, 30 in 2006, and 27 in 2007. The age range of subjects was 3 to 5 years old. The evaluation form consisted of two types of questions. One is a 4-points-grading system to a provided question “Are contents of the program appropriate for your kids?” In this grading system, 1 means “it suits very well” and 4 means “it does not suit at all”. The other is a free comment for requests to coaches. In the evaluation of 2007, extra questions were added. The extra questions were “Any behavioral change in a group?” and “Any behavioral change in the individual? Answers for these questions were chosen from one of 4 comments, A: I strongly agree, B: I agree, C: I disagree, and D: I strongly disagree. Result: The average point of the 4-point-grading system to the question “Are contents of the program appropriate to your kids?” is 1.76 in 2005, 1.76 in 2006, and 1.81 in 2007. The major comment for requests to coaches in 2005 was “Coaches were very polite to kids” for good and “We need a preliminary meeting at the beginning of the year.” for bad. The major comment for requests to coaches in 2006 was “Coaches became very close to kids and kids like the coaches” for good and “Coaches need to show a better approach to handicapped kids.” for bad. Major comment for request to coaches in 2007 was “Coaches’ approach to handicapped kids was very good.” for good and “Coaches visit our kindergarten more often.” for bad. Answers for the question

---

1) 競技スポーツ学科 2) 生涯スポーツ学科 3) 横浜F・マリノス

“Any behavioral change in a group?” were 3 of A, 16 of B, 5 of C, 0 of D, and 3 of no comment. Answers for the question “Any behavioral change in the individual?” were 4 of A, 16 of B, 5 for C, 0 of D, and 2 of no comment. Conclusion: Since a high average score in the grading system in each year were reported, it is clarified that this project suits kids who are under the age of 6. Also, it is clear that kids are able to learn social skills through this project.

Key words : キッズプロジェクト, 巡回指導, サッカー, 社会性, キッズリーダー

## I. 緒言

近年, 子どもたちの体力低下が叫ばれている。別所(2006)はこれに関して, 全体的な体力低下ではなく, 体力の高い子どもとそうでない子どもの二極化が進んでいるとし, 体力の低い子どもたちの特徴として特に背筋力の低下を挙げ, そこに起因する静的な姿勢の悪化がその他の体力要素の低下にも結びついているとしている。また, 子どもたちが遊ぶ場所の確保に関しても諸外国, 特に米国ではプレイグラウンド運動と呼ばれる運動が1885年から行われ, 現在もその影響を強く残す活動が続いている(一村, 2008)など子どもたちの遊び場を守ろうとしてきたのに対して, 近年の日本では公園や空き地など子どもたちの遊び場となっていた場所の数が減少を続けている。さらに, テレビゲームに代表される体を動かさなくても楽しいという満足感を得られてしまうツールの台頭も子どもたちが仲間とともに体を動かす機会の減少の要因となっている。小澤(2008)はこれら運動やスポーツをする時間の減少, スポーツをする空間の減少, そしてスポーツを共にする仲間の減少を総じて「三間の減少」という言葉を用いて, 現代社会に警鐘を鳴らしている。

また, 直接的な影響は明らかではないとしても子どもたちを取り巻く学歴偏重の社会も運動への意欲を低下させていると考えられる。及川ら(2000)の行った小学生を対象とした運動の得意・苦手に関する調査において, 運動が嫌いだとする理由の中に「運動ができてでも勉強ができなければダメ」や「トクすることがない」といった運動そのものへの

興味の喪失や否定を意味する回答があったという報告は驚きの事実である。

びわこ成蹊スポーツ大学(以下BSSC)ではこれらの現状を改善していく第一歩として男子サッカー部の学生が中心となり日本サッカー協会が提唱する「キッズプロジェクト」に倣い, 同協会の発行する認定資格「キッズリーダー」を有する学生コーチたちが幼稚園・保育園を巡回し, 運動指導をすることを通して子どもたちが体を動かす楽しさを知り, 運動への興味を引き出すことを主な目的とする活動を行ってきた。

巡回指導開始から3年が経過し, 少しずつその存在が地域に広まってきた2005年度から2007年度までの3年間, 各園の園長及びクラス担当の先生に巡回指導の評価に関するアンケートを行い, その回答を基に次年度のプログラムの改善を図ってきた。本研究では, これまでのアンケートの内容より, これまでのプログラムの経過の検証と今後の発展のために必要なことを検討することを目的とする。

## II. 方法

巡回指導を行っている滋賀県湖西・湖北地区の幼稚園及び保育園の保育者に対しアンケート調査を2005年度から2007年度の各年度末に実施した。回答を得られたクラスの数はいは2005年で18クラス, 2006年は30クラス, そして2007年は27クラスであった。巡回指導の対象となった園児の年齢は3～5歳であった。

設問には「指導の内容は園児に適していたか」, 「コーチへの要望」などを設定した。全体的な評価を問う設問「指導の内容は園児に

適していたか」については、「大変そう思う」、「そう思う」、「思わない」、「まったく思わない」の1点を最高得点、そして最低点を4とする4検法を行い、各年度の平均点を比較した。同時に、自由記述の欄を設け、コメントを得ることにした。また、第3回アンケートでは「グループの中での変化」及び「個人の中での変化」という欄を設け、保育者から見た子どもたちの変化を同様に4検法で表し、その具体的な理由も集計した。

### Ⅲ. 結果

#### 1) 指導の内容は園児に適していたか

「指導の内容は園児に適していたか」というプログラム自体の評価を問う設問に対し、各年度の評価点の平均は2005年度において1.76、2006年度では1.76、2007年度においては1.81であった(図1)。2007年度においては回答の全てが「大変そう思う」または「そう思う」という結果となった。

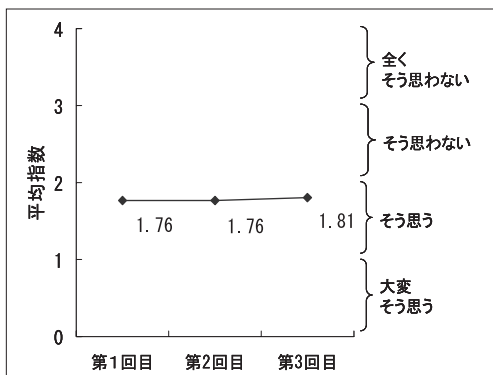


図1. 指導内容は園児に適していたか?

#### 2) 子どもたちの変化について

第3回アンケートでは集団内や個人内で見られた変化についての設問も追加し、調査した。

##### a) 個人の中での変化について

「個人の中で感情や行動に変化が見られるようになりましたか?」という問いに対し、「大変そう思う」4園(15%)、「そう思う」16園(59%)、「思わない」5

園(19%)、「まったく思わない」0園、無回答2園(7%)という結果となった(図2)。表1に自由記述欄で得られた主なコメントをまとめた。

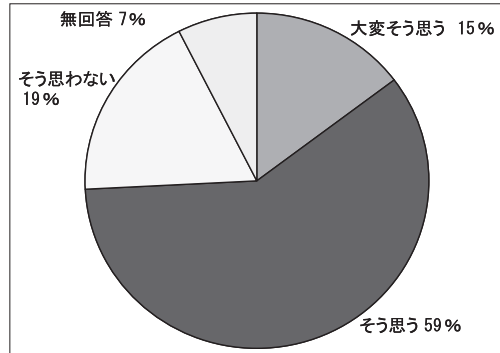


図2. 個人の中での変化が見られるようになりましたか?

表1. 個人の中での変化の記述回答

個人の中での変化—理由・事例
<ul style="list-style-type: none"> <li>生活面ではコーチに見てもらおう、強くなろうという思いで苦手なものを食べようとしたり、我慢したりする面も見られた</li> <li>担任以外と触れ合ういい機会だったと思います</li> <li>コーチに褒めてもらって、自信が付き、積極的に何でも挑戦するようになった</li> <li>運動の嫌いな子も少しずつ積極的に体を動かせるようになった</li> <li>負けたりすると悔しがったりするが次また頑張ろうとするようになった</li> <li>目立たなかった子がサッカーの技を決められたの見て他の子たちから認められるようになって自信をつけた</li> </ul>

##### b) 集団の中での変化について

「友達同士での係わり合いなど、集団の中での変化が見られるようになりましたか?」という問いに対し、「大変そう思う」は3園(11%)、「そう思う」は16園(59%)、「思わない」は5園(19%)、「まったく思わない」は0園、無回答は3園(11%)という結果となった(図3)。表2に自由記述欄で得られた主なコメントをまとめた。

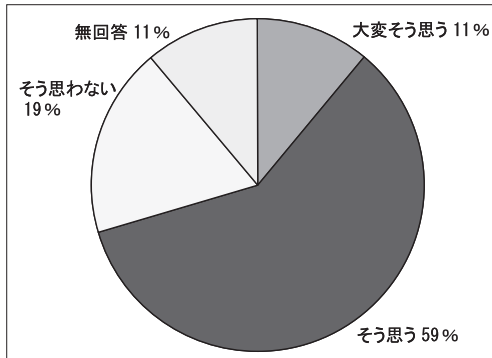


図3. 集団の中での変化が見られるようになりましたか？

表2. 集団の中での変化の記述回答

集団の中での変化—理由・事例
<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達同士で励ましあったり注意し合ったり、「ごめん」・「ありがとう」がすんなり交わせるようになった</li> <li>・友達のことを考えて遊べるようになった</li> <li>・ルールを守るからこそ楽しいということや、みんなでひとつのもの（雪だるま）を作ることの楽しさを知るようになった</li> <li>・集団遊びを始めるようになった</li> </ul>

表4. 2006年度調査

第2回調査
良かった点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・けじめのある話し方ができていた</li> <li>・園の行事にも参加してくれた</li> <li>・子どもたちに積極的に関わってくれた</li> </ul>
改善点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入りづらい子、障害のある子にも声を掛けて欲しい</li> <li>・説明が子どもたちは難しいときがあった</li> <li>・指導時以外の時間でのメリハリを付けて欲しい</li> </ul>

表5. 2007年度調査

第3回調査
良かった点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・障害をもつ子どもへの対応がきちんとできた</li> <li>・毎回打ち合わせが出来たのがよかった</li> <li>・園児たちの発達段階に合った活動だった</li> </ul>
改善点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・園児を呼び捨てにしないで欲しい</li> <li>・活動を時間通りに始めて、終えて欲しい</li> <li>・もっと来園する回数を増やして欲しい</li> </ul>

### 3) プログラム及びコーチについて

表3, 4, 5は年度毎の記述アンケートによって得られたプログラム及びコーチへの主

表3. 2005年度調査

第1回調査
良かった点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の遊びも取り入れてよかった</li> <li>・メニューに工夫があった</li> <li>・子どもたちへの接し方、話し方がよかった</li> </ul>
改善点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・1回1回が単発で終わっていた</li> <li>・事前打ち合わせの時間がなく保育者が関われない</li> <li>・指導時以外の時間でのメリハリを付けて欲しい</li> </ul>

な評価コメント及び要望である。

## IV. 考察

### 1. 指導内容は園児に適していたか

#### a) 指導者として

一貫指導において、松田（2003）は幼少期に重要なことは仲間との関わりの中で生まれる「思いやり」や「ライバル心」という「感性」を育てることであると述べている。また、谷本（2001）によると運動遊びには運動すること自体に熱中することで得られる個人の中での喜びと友だちとともに同じゴールを目指すことで得られる集団の中での楽しさがあるとし、過去の自分ができなかったことができるようになったり、新たな技術を身につけたりして、さらなる成長の可能性を持つる自分に対する自信や誇りを獲得していくことが大切であるともしている。BSSCの巡回指導のプログラムメニューにはこれら、個人

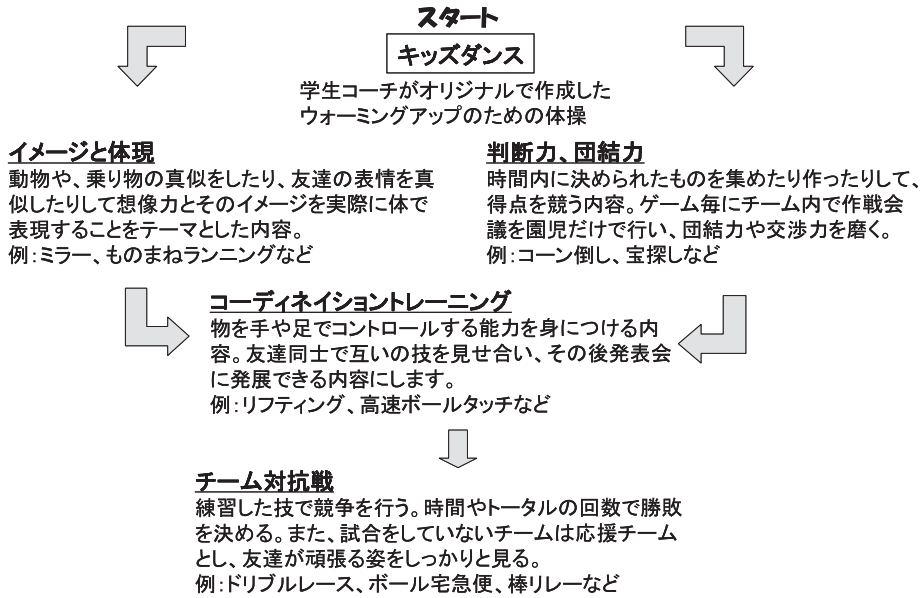


図4. プログラムの構成

や集団による様々なボール運動や音楽に合わせたダンスなども盛り込まれており、子どもたちが体を動かすことを好きになるきっかけとなる要素が多分に含まれている（図4）。

指導者や保育者としての運動活動に関する子どもへのアプローチとして子どもたちが自ら進んで遊びに向かうような働きかけを行なうことが子どもたちの自主性を育てていく（木村ら，2009）。BSSCのプログラムにおいても各セッションの内容に子どもたちの自主性を育てるために自分達のイメージを表現したり、話し合いを通じて意見を出し合ったりする場面を設定しており、子どもたちはその中で技の出来具合や勝敗に一喜一憂し、精一杯取り組んでいた。

決められたルールの下での遊びとはいえ活動していく中で子どもたちの慣れや能力差を考慮し、動きの制限を加えたり新たな選択肢を増やしたりするなどの柔軟なルール変更はその遊びを円滑且つ楽しいと感じるものにするために必要な作業である。そして、これらの作業が指導者によるものだけでなく子どもたちの中で自発的に行われることも多くある。古城ら（2008）は、遊びの中で話し合い

をして既存のルールを変更したり、新たに別のルールを追加したりしてより自分たちのオリジナルな活動として適切な形に調整すること自体も子どもたちにとっては楽しみの一つであると述べている。また同氏は自分達で自分達のために行うルール変更の過程の中でその集団のリーダー役が現れたり、その遊びが苦手な友だちのために公平さを出すためのルール変更をみんなで考え合ったりと社会性の獲得につながる事象が発生すると示しており、BSSCのプログラムにおいても各セッションにおいて話し合いの場面の設定や突発的な子どもたちの意見を大切に扱うことなどといったコーチの柔軟な指導姿勢をしっかりと備える必要があると考えられる。

また、プログラム構成によるアプローチの方法の工夫に関しても良い評価が得られた。2006年度のアンケートで挙がった「活動に入り辛い子どもや障害を持つ子どもへのアプローチの改善」については2007年度アンケートに寄せられた評価コメントにも表れ、その改善が評価されている。子どもたちの運動をすることの好き嫌い、または集団での運動活動への参加の好き嫌いの理由は多岐に渡る。及

川ら（2000）の調査によると、運動が嫌いだとする理由の中に「皆ができて自分だけできないのがイヤ」や「リレーで仲間の足を引っ張るのがイヤ」といったものがあり、運動能力に対するコンプレックスが運動嫌いの一要因になっているが示唆される。このような場合は、該当する子どもは運動そのものを嫌いではないのである。同調査において、「運動が得意か」という問いに「とても得意」または「わりと得意」と答えた被験者は全体の約40%であったのに対し、「運動が得意になりたいか」という問いに対して「とてもになりたい」、「かなりになりたい」、そして「すこしになりたい」とした回答を合計すると全体の約95%の被験者となり、大多数が運動を得意になることに対してポジティブなイメージを持っていることがわかる結果となっている。このように、運動が得意になりたいが自分に自信がなく活動に対しても前向きに取り組むことができない子どもたちはたくさんいると考えられる。BSSCの巡回指導では運動のみのプログラムではなく動物の物真似や雪ダルマ作りのコンテストなど子どもたちの様々な感性や能力を友だちの前で披露する機会を含んだ内容を設定しており、運動のあまり得意でない子どもたちも活躍する場面が多く、入って行きやすい構成であると言え、これらの取り組みに対する評価は個人の変化に関する記述欄にも挙がっている。

また、楽しく行うために子どもたちへの声掛けに関しても「鬼」や「爆弾」などの表現の使用を控えるという学生コーチの工夫が見られるようになった。そして、「退場→復活」など子どもたちにとって難解な表現も避けるようにしている。これは、保育者からのアドバイスによるもので、言葉の選択によっては子どもに不要な恐怖感を植え付けたり誤解を生んだりすることから改善に至った。BSSCのプログラムは規律を学んだり、挨拶をしたり人の話を聞く態度を育てたりするなど運動のみのプログラムではなく運動することを通

して子どもたちの社会性を育む事に寄与することも巡回指導の目的の一部であり、そうするために学生コーチたちも保育者と協力し一丸となって指導を行えていることがアンケート結果のコメントよりわかる。

#### b) 園関係者とプログラム事前打ち合わせの方法

アンケートの回答より、園児は巡回指導を楽しみにしており、保育者からの目にもプログラム内容が適切であると評価されている。「指導内容は園児に適しているか」という満足度に対する質問への回答では全ての調査年度で高い平均点を得ており、2007年度においては全ての回答者が「大変そう思う」または「そう思う」と回答していた。

より良いプログラムにするために特に園関係者との綿密な打ち合わせを行ったことが挙げられる。これは2005年度のコメントより得られた要望として「事前打ち合わせの時間がなく保育者が関われない」という点が挙げられたからである。この問題に対して2006年度からは学生コーチの担当する園を固定し、関係者とのコミュニケーションがより図りやすい体制にするとともに、年度始めに園側の要望の詳細を含む年間計画表を作成し、各月毎の大まかな目標を園の関係者たちと決めるようにした（図5）。また、各巡回日の内容については事前にFAXを用いて関係者と綿密な打ち合わせを行うようにした。事前打ち合わせではその日行う予定であるプログラムが示され、各セッションのねらいを明記することで園関係者や保育者に指導内容がよくわかるようにした（図6）。この他にも、各巡回指導後には園関係者との反省ノートを通した振り返りを行うことで、学生コーチたちへのフィードバックが可能となり、次回の巡回指導をよりよいものとするための学びができるようにした（図7）。これらの改善により密なコミュニケーションの下、内容ある巡回指導を提供できるようになったといえる。また、そ

年長

2009年度 キッズプログラム年間計画表

担当園( )

	4	5	⑥	⑦	8	⑨	⑩	⑪	12	1	②	3
目標	フーキーの約束を守り 身体を動かすことを楽しむ。			フーキーで友達といっしょに運動 おびえを減らす。			フーキーに慣れながら力を合わせる。 ルールを知る。遊びを楽しむ。			少し困難なことをやってみよう。 おびえを減らすことを楽しむ。		
メニュー	フーキーの約束を守る 知覚心や運動心 を高める。 ⑤ 走る、跳ぶ、蹴る (ボールを蹴る練習) ⑥ ルーキーの約束を守る (フーキーの約束を守る)			フーキーで友達といっしょに運動 おびえを減らす。 ⑦ 走る、跳ぶ、蹴る (フーキーの約束を守る)			フーキーに慣れながら力を合わせる。 ⑩ 走る、跳ぶ、蹴る (フーキーの約束を守る)			少し困難なことをやってみよう。 おびえを減らすことを楽しむ。		
メニューのポイント	* 新田さん。 身体的な遊びや おもしろいゲーム を取り入れる。 おもしろいゲーム を取り入れる。 おもしろいゲーム を取り入れる。			* フーキーの約束を守る おびえを減らす。 おもしろいゲーム を取り入れる。			* フーキーに慣れながら力を合わせる。 おもしろいゲーム を取り入れる。			* 少し困難なことをやってみよう。 おびえを減らすことを楽しむ。 おもしろいゲーム を取り入れる。		
反省												

11/5 フーキー公開練習  
については  
今後報告の予定です。

図5. 年間計画表

## 第4回 キッズサッカー

対象：5歳児

日時：12月1日

### 【メニュー】

**キッズダンス**・・・忍たま乱太郎のテーマでウォーミングアップのダンスを踊ります。

☆このダンスは、毎回のキッズサッカーで行っています☆

**ものまねランニング**・・・動物や、乗り物の真似をしてランニングします。

動物や、乗り物の動きを、自分でイメージして、そのイメージしたことを、実際にからだで表現する練習です。

**たから探しゲーム**・・・園庭に散らばるマーカーを多くとったチームが勝ちとなるゲームです。

様々なところにマーカーが落ちているので、走りながら周りをよく見る練習です。チーム戦なので、仲間たちと連携して勝利を目指します。今回は2回ゲームを行い、1回目と2回目のゲームの間に、作戦会議の時間を設けて、どうやったら勝てるかななどの作戦を子どもたちに考えてもらいます。

**ボールフィーリング**・・・ボールを使い、ボールキャッチやボールリフティングを練習します。

ボールを手や足で上手にコントロールする能力を身につけます。今回は、練習の時間に上手にできた人に、みんなの前で見本を見せてもらいます。そういう機会を設けることで、子どもたちには自信をつけてもらいます。

**よこばりゲーム**・・・足でドリブルをし、ボールを自分の陣地に運ぶチーム戦のゲームです。

時間内により多くのボールを運べたチームの勝ちです。ボールドリブルの感覚を、ゲームの中で身につけていきます。勝ち負けがあるゲームなので、「勝ってうれしい。負けて悔しい」という気持ちを体験してもらいます。また、応援チームも設けて、仲間たちが頑張っている姿を応援します。

図6. 各セッションのねらい

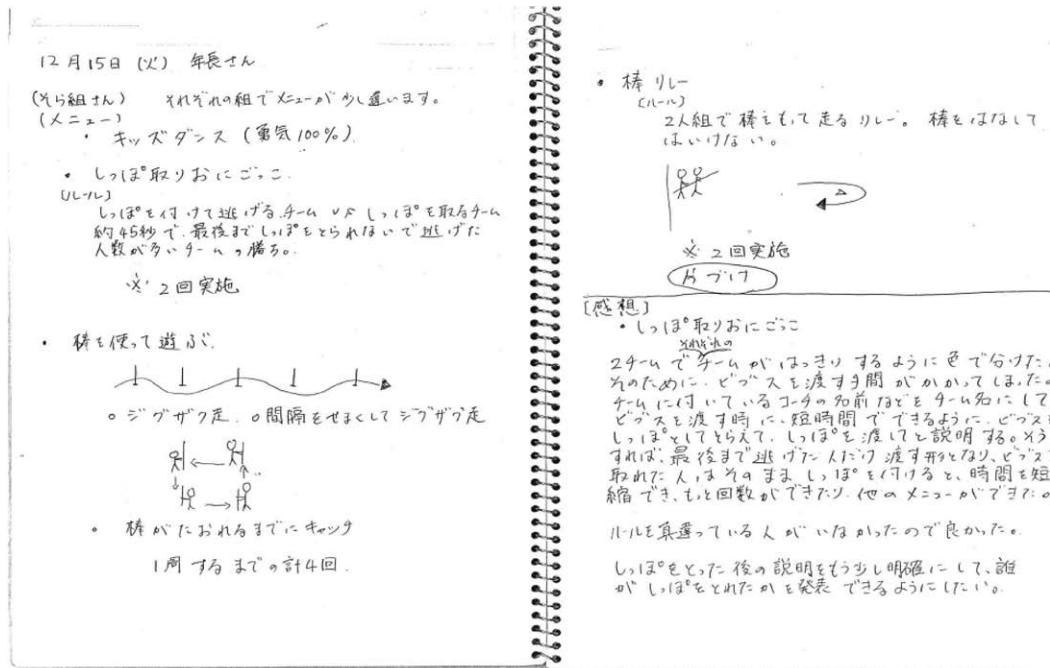


図7. 反省ノート

の結果がアンケート結果にも反映された。

### c) 各セッションの構成

プログラム構成の枠組みは図4に示すとおりである。2007年度に学生が中心となって作成したキッズダンスをプログラムの最初のウォーミングアップとして採用し、BSSCのプログラムとしての独自性を出しており、園側からも高評価を得た。ウォームアップの後は物真似をしながら走ったり、指示された動物の絵の回りに集合したりするセッションを入れて子どもたちが盛り上げ、それに続く技術系の運動や競争のセッションへのスムーズな移行が行なえるような構成としている。

技術系のセッションでは子どもたちの「からだのしなやかさ」や「器用さ」を培うためにサッカーボールやアジリティボール、ゴムなど用具を使用した運動を取り入れている。運動用具を使用した遊びは人気が高く、楽しく子どもたちの運動能力を高めたり、積極的な友だちとの関わりを促したりできるなどのメリットがあるといえる。浅井(2005)は

小・中・高・大学生の「投げる」や「走る」、  
「跳ぶ」、「泳ぐ」、「スキー又はスケート」など  
9項目からなる「調整力」とその被験者の児童  
期で使用した運動用具と使用頻度に関する研  
究において、ほぼ全ての被験者群の間で  
「大きいボール」または「小さいボールの」使  
用程度の高いグループが調整力においても高  
い値を示していることを報告した。このこと  
からも、ボールを使用するセッションの有効  
性は証明されている。

## 2. 個人の中での変化について

「個人中での変化」に関しても、アンケート  
結果より変化があったと感じている保育者が  
多い。運動を通して変化する個人の内面的要  
素の主たるものはまさしく、自信の確立であ  
るといえる。アンケートに寄せられたコメン  
トからもわかるように、子どもたちが今まで  
出来なかったことが出来るようになることで  
自信を深めたり、友だちから評価されてうれ  
しいと感じたりすることは運動をより意欲的  
に取り組むきっかけとなるだけでなく、自己



形成においても努力する心や諦めない心の育成に大きく影響していくものであるといえる。谷本は(2001)子どもたちがそれらの過程を経て、上手でない運動に対して不可能だと感じるのではなく、乗り越えることの出来る次の目標として受け止めることが出来るようになってから競争を取り入れるほうがよいと述べている。及川ら(2000)の調査においても「苦手」とする評価が多かったものに対人種目である「ドッジボール」や「サッカー」が挙げられ、その一方で「得意」とする評価が多かったものとしては「跳び箱」や「縄跳び」など個人の中での記録に挑戦する種目が挙げられている。これらのことを考慮すると、プログラムとして最初は個人の発達段階に合わせ易い種目を多く選び、自己への自信を深めたり、個々の違いを認識したりすることができる内容にすることが大切であることがわかる。BSSCの巡回指導の評価アンケートのコメントにも同様に、子どもたちからのコーチへのアピールがよくわかるコメントや実際に褒められることによって自信を付け、積極的に物事に向き合うようになったり、苦手なことに挑戦しようとしたりする行動が見られたというコメントが得られた。同時に苦手な物に挑戦してみようとする姿勢の出現や勝負に負けたときにも自信喪失ではなく次回での勝利を目指す姿勢が現れていることを示唆するコメントも得られたことからBSSCのプログラム構成は子どもたちの個人の内面発達、すなわち自己への自信の確立の時期を無視することなく適切に競争種目を取り入れられていると考えられる。

### 3. 集団の中での変化について

集団での活動において目標を達成したり、参加者全員が気持ちよく活動できたりするために参加者ひとりひとりがルールを守り、行動することは非常に重要である。その中でもアンケートのコメントに得られた「ありがとう」や「ごめんなさい」を友だち同士で言い

合えるようになったことは、互いを尊重するという意識の表れであるといえる。集団の中では人間関係の構築や変化によって個人に様々な影響を与える。古城ら(2008)によると集団遊びの中での喧嘩や不満などによる問題発生はルールの作り変えが行なわれる要因のひとつとされている。このような理由によりルールの作り変えが行なわれた場合、その後問題解決による人間関係の修復が行われ、そのようなやりとりから子どもたちは人間関係の形成を学ぶものだと同氏は述べている。社会性に関して、田中ら(2008)によると、3歳児と4歳児を比較すると喧嘩が起こった場合、4歳児は自己の感情を認識し、はっきりと表現するようになると同時に解決のために譲歩や依頼の行動をとることが見られ、社会性が身につくにつくにつくあるとし、自己認識がこの3歳と4歳の間で獲得できることを示唆している。また、5歳児ではボールゲームにおいても、ルールの中での楽しみや友達との協力なども意識するようになるとし、よりボールに関わる時間増えるよう、または技術を発揮し易いようプレッシャーを少なくするために少人数でのゲームを行なうなどの配慮を行うとよりその活動を楽しめるようになるとしている(村岡, 1997)。

BSSCの巡回指導の評価に関するアンケートでは「集団遊びを始めるようになった」というコメントが得られた。これは当に子どもたちが自分の勝手だけでは通らないという制約があるとしても、仲間と感情の共有や協力することによって可能となるさらに大きな遊びへの発展といったひとり遊びとは異なる楽しさを得ることの出来る集団活動を選択するようになったということであり、子どもたちが個人と集団を理解し始めた表れであるといえる。これらの事象の現れはプログラムの各セッションにおいて、作戦会議の場の設置や仲間の気持ちになって応援することなど子どもたち同士が関わり合って内容が進行していく形式を多く取り入れたことによる成果であ

ると考えられる。

#### 4. これからの可能性と自由記述から見る課題

現在サーキットポールでのスラロームやドリブルリレーなどは採用されているが、ひとつの可能性としてアジリティーラダーやプライオメトリックスなどに代表される身体能力を向上させる種目も取り入れていくことは可能であるといえる。蒲ら(2004)によると、幼児を対象とした2ヶ月間のラダートレーニングのプログラムによる幼児のステップの成就率は統制群と比較して有意に増加したとしている。この場合の成就率とは長さ4.2mのラダーを成功及び失敗に基づいて3検法により得点化したものを比較した内容であった。指導した6種類全てのステップにおいて有意に成就率が向上したことから、蒲らは幼児期におけるラダートレーニングは幼児のアジリティー能力の向上に効果を認めたとしている。また、渡部(2008)による小学校低学年の児童を対象とした1年間の定期的なプライオメトリックス教室の報告によると、参加児童の跳躍高(m)/接地時間(sec)で表されるリバウンドジャンプ値が教室参加の前後で有意な増加が見られたとされている。以上の報告より、幼児期からのトレーニング活動により運動能力の開発は可能であるといえる。また、運動能力の発達時期について、本郷ら(2006)の宮城でのキッズプログラムの実施に関する調査結果ではコーディネーション能力の向上が5歳に顕著に見られるとされている。3歳から5歳の幼児を対象とした25m走や反復横とびなどを含む運動能力調査を行なった天野ら(1985)の報告にも真っ直ぐ走る能力やバランス力などは3~5歳時に向上していき、5歳児では前述の能力に加えて敏捷性など運動能力全般の発達が最も顕著になるとされている。BSSCの巡回指導においてもトレーニング要素を多く含んだ内容を巡回指導の目的の範囲内で行なうことや対象園児の精神年齢や肉体系年齢によって内容を特徴づけ

ながら取り入れていくことはプログラムのさらなる充実につながるといえる。

コーチへの要望及び課題として多く挙げたものは「来園回数の増加」である。保育者は月を通しての継続的な巡回指導を望んでいると考えられ、その理由が大きく二つあるといえる。まず、一つ目の理由として多くの園が夏季のプールでの活動や、秋の運動会、そして冬季のクリスマス会への学生コーチ参加要請があるなど、園の関係者たちは学生コーチに対して一年を通した子どもとの関わり合い望んでいる。これはできるだけ長い時間子どもたちと接し、ひとりひとりの細かいところまで把握することがいい指導の基盤となるからである。また、図4の園関係者からのコメントにもあるように一年という時間経過の中や各行事をこなすことで急速に成長していく子どもたちと同様に、プログラムも成長に合わせた年間の変化が必要であり、その修正・発展を加える適切なタイミングは従来月に一回の巡回指導では学生コーチには見えてこないというのが二つ目の理由であると考えられる。これらを解決することでさらに子どもたちの現状に沿った決め細やかなプログラムの確立が可能となるはずである。しかしながら、現在は費用面や学生コーチと園のスケジュール調整など来園回数の増加を実現するに当たって解決すべき現実的な問題がいくつかあるといえる。今後のプログラムの関わり方として、園側の年間計画とのコラボレーションをさらに図ったり、園内ミーティングの報告を参考にしたりするなどしてスケジュールの少ない月にも子どもたちのタイムリーな状況を把握する努力が必要であるといえる。また学生コーチの募集・勧誘を進め、コーチの増員を図ることもスケジュール問題への解決の糸口となると考えられる。

#### V. まとめ

子どもの発達段階に沿ったプログラムを構築するために主に留意する点は、年少クラス

では自己記録への挑戦や発表会など、子どもが自己を認識し、他を認めることを達成し易い場面の設定と声掛けなどを含む各セッションでのコーチのアプローチの工夫であり、自己確立が完成する年長クラスでは競争や共同作業など子どもたち同士で関わり合う場面を多く設定し、社会性を磨くようにすることである。

これらの点に対して、現在BSSCが行なっている巡回指導は子どもたちの発達段階に沿ったプログラム内容であり、園関係者からも好評価を受けている。巡回指導によって子どもたちの行動に変化が現れたことや園の関係者からの反応に一定の評価があったことは巡回指導開始時から今まで少しずつ発展しながらより良いプログラムの編成が行なわれてきた証であるといえる。今回挙げた可能性や改善点を基にさらなる発展が期待される。

#### 参考文献

- 別所龍二. (2006)『子どもの体力低下と「姿勢教育」』. 四天王寺国際仏教大学紀要. 44 : pp.125-138.
- 一村小百合. (2008)「子どもの遊び場について考える」. 関西福祉科学大学紀要. 12 : pp.91-100.
- 小澤治夫. (2008)「運動づくりからのアプローチ」. 体力科学. 57 (1) : p.46.
- 及川研・深谷和子・吉野真弓. (2000)「小学生における運動の得意・苦手とその関連事項について」. 日本教育社会学会大会発表要旨集録. (52) : pp.233-236.
- 松田保. (2003)「一流選手を育てることはどういふことか」. 二見書房 : pp.95-101, pp.159-161.
- 谷本月子. (2001)「子どもの遊びと情動」. 日本保育学会大会研究論文集. (54) : pp.44-45.
- 木村美千代・村岡眞澄. (2009)「運動遊びを楽しむ幼児を育てる」. 愛知教育大学教育実践総合センター紀要. 12 : pp.237-242.
- 古城建一・川内敬介. (2008)「学童保育クラブにおける遊びの研究」. 大分大学教育福祉科学部研究紀要. 30 (1) : pp.71-86.
- 浅井修. (2005)「子どもの調整力の修得に及ぼす要因の検討」. 大阪樟蔭女子大学論集. (42) : pp.173-184.
- 田中洋・阿南寿美子. (2008)「いざごぎの発生と解決過程の発達の検討」. 大分大学教育福祉科学部研究紀要. 30 (2) : pp.171-180.
- 村岡眞澄. (1997)「運動遊びにおける幼児の遊び意識の発達と保育者の援助」. 日本保育学会大会研究論文集. (50) : pp.448-449.
- 蒲真理子・佐藤新一・宮口和義・鶴澤典子. (2004)「幼児期におけるアジリティーラダーを使用した遊びに関する研究」. 日本保育学会大会研究論文集. (57) : pp.522-523.
- 渡部将司. (2008)「プライオメトリックトレーニングを取り入れた運動教室の頻度が子どものリバウンドジャンプ能力に及ぼす影響」. 体力科学. 57 (3) : p.420.
- 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・太田久美子・平川昌宏・斉藤樹里・碓井貞治・碓井百合. (2006)「保育所におけるサッカー巡回指導に関する研究」. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. (55) 1 : pp.263-282.
- 天野博江・桑原信治・伊藤功子・市原憲郎. (1985)「幼児の運動能力発達に関する縦断的研究」. 東海女子短期大学紀要. 11 : pp.79-87.

